

さくら第490号

令和2年10月

# さくら

発行所 さくらそろばん  
 発行者 平瀬 重雄  
 春江町境 17-7: Tel. 51-1337  
 hirase@mx2.fctv.ne.jp

他人の物指し  
 自分のものさし  
 そろばんの法  
 ちがうんだな  
 ④

## 『日に日に一倍』

今から約400年あまり前、大阪城で豊臣秀吉は御伽衆(おとぎしゅう)を集めて話しています。御伽衆とは、読み書きの苦手な秀吉が耳学問をするため、いろんな知識や特技などを持つ人たちと話したり、軍事や経済などを進めるための意見を聞いたりするための集まりで700人もいたといわれています。

その中でも秀吉から特に気にいられていたのが曾呂利新左エ門(そろり しんざえもん)という人です。本名は杉本新左エ門ですが、彼の仕事は鞘師(さやし)であり、刀を鞘に入れるとき、そろりそろりと入ることから、曾呂利新左エ門と呼ばれていました。

彼はよくトンチが働き、ユーモラスな人で話しがとてもうまいそうです。秀吉は、猿に顔がにていると思われるのがいやだと嘆くので新左エ門は、「猿のほうが太閤殿下をしたって顔を似せたのです」と言って笑わせたといわれています。

またある時は、秀吉が病気になりしだいに弱って寝込んでしまった時に新左エ門は、庭にある松を見ながら、「御秘蔵の常盤の松は枯れにけり 千代の 齢を 君にゆずりて」と読み、秀吉は元気になったといわれています。この句の意味は、大事な松が枯れてしまうが、これは千年も生きる松の命を、太閤殿下にゆずったからというたとえです。

ある日、秀吉は新左エ門に褒美(ほうび)をとらず何が欲しいかと問えば、新左エ門は、かたわらにある将棋盤をさし、9×9のマス目があるから81マスに米粒を置きたい。

今日は1粒、明日は倍の2粒、3日目は4粒

そして5日目は8粒というように倍ずつ欲しいと言います。

秀吉は、たったそれくらいでいいのか、欲のない新左エ門だなと笑いながら許可します。

10日目は512粒でありそれまでを合計しても1,023粒。茶わん1ぱいは約3,300粒といえますから、12日目で1ぱいちよつと。

米1粒の重さが0.00002kgとするならば81日目なんてたいしたことないと油断していた秀吉ですが、19日目には10kgとなり、26日目には何と1,342kgです。29日目には10トンを超す量となります。

さあ大変、このままいけば大阪中の米がなくなってもまだ足りませんので、新左エ門にあやまって違う褒美をわたしたそうです。

このような計算方法で81回目まで行くとどれだけの数になるかチャレンジしてください。

さて、江戸時代に発行されたそろばんを使った計算方法を書いた「塵劫記・じんこうき」というベストセラー書物があります。

京都の吉田光由が著した本であり多種多様な計算があり、その第三目録の第六に「ひにひに一ぱいの事」というなかに▲米一粒をひにひに一ぱいにして、三十日には何ほどにぞ成ぞと云う時に、五億三千六百八十七万九百十二粒に成るといふ。という問題があります。

一倍は今日にいう二倍のことであり、一倍を公式に二倍というようになったのは明治時代からといわれています。

ところで、0.1mmの紙を1回、2回、3回と半分折りたたむと富士山の高さ3,776mを超えるには何回折ればいいのかという問題です。

何と、25回で3,354mで26回目には6,708mとなり、27回目では13,416mとなります。もちろん、そんなに折ることはできません。せいぜい5、6回でしょう。

塵劫記には「たち木の長さをつもる事」の中に、鼻かみを四角に折り、3角形にして測る方法が書いてあります。江戸時代からそのような方法があったのですね。大した事ないと思うことでも、よくよく調べ考えると全く違いますね。